ふかしんメッセージ㊶
― 校長から香住のみなさんへ ―

令和６年３月４日（月）

「受験の価値」

先週末金曜日、３月１日は県教育委員会、ＰＴＡ、同窓会、地域の皆様に来賓として御臨席いただき、４年ぶりにすべてが平常通りに、厳粛かつ心温まる「第３７回卒業証書授与式」を行うことができました。関係の皆様に心から篤く御礼申し上げますとともに、あらためて３７期生のみなさんの洋々たる前途と新たなスタートを在校生、先生方と共に心からお祝いいたします。

卒業証書授与式が終わると、明日は「令和６年度入学者選抜学力検査」です。また、３７期生のみなさんの多くは、今週、国公立大学前期試験の合格発表を迎え、来週は同じく後期試験が実施されます。高校入試でも大学入試でも、当然ながら誰もが志望校への「合格」を目指して努力してきたわけですから、「合格」できれば、受験生本人はもとより家族にとってもこんなにハッピーなことはありません。でも、万が一、「不合格」になったからと言って、それはただの「失敗」だと言えるのでしょうか？ ちょっと想像してみてください。共通テストや模試の判定から「おそらく合格できるだろう。」と思える学校に予想通りに「合格」した時、みなさんは自然に涙があふれてくるほど喜べるでしょうか？（１年生のみなさんは香住に「合格」した時どうでしたか？）きっと、「やっぱり合格するよね。」と思って、涙があふれてくるような気持ちにはならないのではないでしょうか。

仮に「不合格」となっても、それは、「果敢に挑戦した」結果であって、決して「失敗」などではないと私は思います。**本当の「失敗」とは、「挑戦しないこと」**なのではないでしょうか！？ **高い目標を持って、達成できるかできないかわからないけれど、それでも本気で努力し挑戦したということは、その後の人生にも必ずプラスになる、得難い貴重な経験になる**はずです。

私は、以前の「ふかしんメッセージ」で、「受験は現代のイニシエーション（通過儀礼）である。」と述べました。受験の不安やきつさから「逃げる」ことなく、最後の最後まで粘り強く努力し続けることによって、「合格」「不合格」という結果を超えて、その人のステージが一段高いところに上がる＝成長を遂げる、という意味で「受験は、現代のイニシエーション（通過儀礼）である。」と述べたのです。言

い換えれば、受験の価値は、受験を通して（受験勉強をやり抜いて）「人間的成長が得られるところ」にあると思っています。私自身の拙（つたな）い経験からも、私の教え子の姿からも、

本気で受験している人は、「合格」したら、嬉しくて涙が出ます。

そして同じように、「不合格」になっても、悲しくて涙が出ます。

当然ながら、本気で挑んでいない人や「不合格」を恐れて志望校を下げた人などは、どんな結果になったとしても、涙は出ません。結局、「合格」であれ、「不合格」であれ、どちらの場合も、本気で「受験」に取り組んだ結果は、涙を流すほど感情が揺さぶられ、その人の人生における大きなイベントとして記憶に残り続け、人生の糧になるのではないでしょうか。そういう意味で、本気で「受験に取り組んだ人にとって、「合格」でも「不合格」でも、どちらもそれは立派な「成功」なのです。私は、「挑戦すること」「挑戦したこと」それ自体に価値があるのだと思っています。

これから国公立大学の結果が出てくると、「合格」になる人も、「不合格」になる人もいると思います。でも、涙が出るような「受験」であったのであれば、みなさんの受験は立派な「成功」であることは間違いありません！

先日、ふとしたことで、２０１６（平成２８）年の「家族への感謝の気持ちをつづる『第 10 回 いつもありがとう作文コンクール』」（朝日学生新聞社主催、シナネングループ共催）で最優秀賞を受賞した、当時新潟県柏崎市の小学１年生だった 松橋 一太 さんの作文を目にする機会がありました。

当時小学１年生！だった 松橋 一太 さんの作文を読んで、私は、色々と考えさせられ、今の自分自身を振り返ることがありました。改めてみなさんと一緒にこの作文を読んでみたいと思います。

最優秀賞「てんしのいもうと」　　新潟県　１年　松橋一太

ぼくには、てんしのいもうとがいます。

よなか、ぼくは、おとうさんとびょういんのまちあいしつにすわっていました。となりにいるおとうさんは、すこしこわいかおをしています。いつも人でいっぱいのびょういんは、よなかになるとこんなにしずかなんだなあとおもいました。

すこしたってから、めのまえのドアがあいて、くるまいすにのったおかあさんとかんごしさんがでてきました。

ぼくがくるまいすをおすと、おかあさんはかなしそうに、はをくいしばったかおをして、ぼくのてをぎゅっとにぎりました。

いえにつくころ、おそらはすこしあかるくなっていました。

ぼくは一人っこなので、いもうとがうまれてくることがとてもたのしみでした。おかあさんのおなかにいもうとがきたときいてから、まいにち、ぬいぐるみでおむつがえのれんしゅうをしたり、いもうとのなまえをかんがえたりしてすごしました。

ごはんをたべたり、おしゃべりしたりわらったり、こうえんであそんだり、テレビをみたり、いままで三人でしていたことを、これからは四人でするんだなあとおもっていました。

でも、はるやすみのおわり、トイレでぐったりしながらないているおかあさんをみて、これからも三人なのかもしれないとおもいました。さみしくて、かなしかったけど、それをいったらおとうさんとおかあさんがこまるとおもっていえませんでした。

ぽかぽかのあたたかいひ、ぼくたちは、ぜんこうじさんへいきました。いもうととバイバイするためです。はじめて四人でおでかけをしました。

ぼくは、いもうとがてんごくであそべるように、おりがみでおもちゃをつくりました。

「また、おかあさんのおなかにきてね。こんどはうまれてきて、いっしょにいろんなことしようね。」

と、てがみをかきました。

ぼくは、てをあわせながら、ぼくのあたりまえのまいにちは、ありがとうのまいにちなんだとおもいました。

おとうさんとおかあさんがいることも、わらうことも、たべることやはなすことも、ぜんぶありがとうなんだとおもいました。

それをおしえてくれたのは、いもうとです。

ぼくのいもうと、ありがとう。

おとうさん、おかあさん、ありがとう。

いきていること、ありがとう。

ぼくには、てんしのいもうとがいます。

校長　深瀬　信也